



Title	近世北海道漁業と海産物流通 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	田島, 佳也
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第6973号
Issue Date	2015-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60488
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yoshiya_Tajima_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：田 島 佳 也

学位論文題名

近世北海道漁業と海産物流通

本論文は、2014 年 5 月に人文科学系の専門書の出版で定評のある大阪・清文堂から出版されたもので、15 の章と 3 つの補論、総計 18 の論考からなる。いずれも単独の論考として、1979 年から 2011 年に亘って個別に発表されたものである。本論文は、個別論考の内容に即し、三部構成をとっている。すなわち、紀州や奥能登の対遠隔地出漁や海運を素材としたⅠ「出漁・交易する海民」、蝦夷地の流通構造と社会構造をテーマとしたⅡ「場所経営と漁民・アイヌ」、海産物の生産・流通・貿易構造を取り上げたⅢ「海産物の生産とゆくえ」がそれである。

第一部（Ⅰ）には、紀州漁民の関東・東北・松前・蝦夷地方面への出漁の歴史的展開を論じた第 1 章・第 2 章・第 3 章と、奥能登の廻船問屋による北蝦夷地（サハリン）を含む松前・蝦夷地交易の歴史的意義を論じた第 4 章が含まれる。とりわけ第 1 章は、アイヌ口承文芸をも的確に素材化したモノグラフとしても秀抜で、18 世紀後半以降の紀州漁業資本の松前・蝦夷地進出が、第 2 章・第 3 章でも論じられるような 17 世紀～18 世紀初頭段階の関東・東北進出とは異なり、強い幕藩制的制約のなかで実施され、アイヌ社会からの収奪の構造をも含みながら展開した点が通時的に論じられている。さらに、第 1～第 3 章では、紀州漁民の旅漁（旅網）の背景に御三家紀州藩の政治的威光が存在した点や、紀州から関東・東北方面に旅漁が恒常化したことが後の江戸を起点とした東廻り海運（太平洋海運）の整備の先鞭をつけたこと、ならびに 18 世紀以降の旅漁不振・衰退の背景に沿海漁業の成長と領主の保護のあったことを指摘し、18 世紀以降の幕藩制的全国市場の成立と流通網の整備との連関を論じている。それに加え、紀州漁民の旅漁が、鰹節や干鰯（魚肥）・鯨油といった水産加工品生産の技術普及に寄与した点の指摘は、本論文第三部（Ⅲ）の叙述と呼応している。第 4 章は、網野善彦が主導した神奈川大学日本常民文化研究所の奥能登文書調査の過程で見出された幕末期の史料を解釈

した章で、廻船問屋時国家が北蝦夷地（サハリン）場所請負人の松前における^{ことわりやど}断宿（保証人）との取引を通じサハリンに積取船を派遣し商品の集荷に従事していたことの意義を、当時の松前における流通構造に照らし論じたうえで、第 1～3 章で取り上げた紀州

漁民の性格と比較検討し、その性格を「海民的」企業家」と評価している。

第二部（Ⅱ）は、近世後期の松前・蝦夷地をフィールドとした章で構成され、幕末に幕府が蝦夷産物の流通促進のために設けた箱館産物会所を扱った第 5 章と、場所請負商人の経営史料の個別実証分析に基づき流通構造や「場所」の社会構造を論じた第 6 章・第 7 章・第 8 章・第 9 章・第 10 章、「場所」共同体論」を理論的に提起した補論 2・補論 3、ならびにクナシリ・メナシの戦いにおけるアイヌ首長の行動を論じた補論 1 により構成されている。このうち第 5 章・第 6 章・第 9 章は、経営帳簿の分析により蝦夷地海産物の集荷・流通の具体的なシステムが明らかにされており、さらに蝦夷地においてこれに特権的に従事した場所請負人の経営実態が、佐藤栄右衛門家（ヲタスツ・イソヤ場所）ならびに林長左衛門家（ヨイチ場所）に即し、個別具体的に描き出されている。これにより、出稼和人漁民の進出が顕著であった幕末の西蝦夷地南部にあって、場所請負人の経営の軸が彼らへの資金貸付に傾斜しつつあったという、田端宏によるシェーマをより実証的に再確認し、これを「漁業金融」、あるいは「水産金融」形成の基盤を萌芽的にも作り出した」（234 頁）と評価する。同時に、出稼和人漁民への資本投下には松前の断宿（問屋）も介在していたことに目を向けるべきと提起している。第 7 章・第 8 章は、西蝦夷地ハママス場所ならびに同ヲタスツ・イソヤ場所における出稼和人漁民の存在形態を分析した章で、「場所」の社会経済構造を意識した分析を行い、社会構成主体として「浜中」と呼ばれる出稼和人漁民（場所請負人に雇用されない出稼者）集団を位置付けている。第 7 章図 2（258 頁）に結実した「場所」の社会構造のモデルは、補論 2・3 に繋がる貴重な実証研究の成果であり、少なくとも当該期の西蝦夷地南部諸「場所」にあっては、こうした「場所」内部に利害を必ずしも同じうしない集団が重層的に組み込まれていた実態を、社会経済史的手法を用いて活写することに成功している。第 10 章は、ヨイチ場所に材をとり、こうした「場所」にあってアイヌ集団が主体的な漁業生産者として果たした役割を可能な限り復元し、従来の被抑圧者としての近世アイヌ社会像に一石を投じ、その後の研究に大きな影響を及ぼした論考である。補論 2・3 は、以上の成果を総合・抽象化し、研究史的な意義を意識しつつ、近世蝦夷地の「場所」に形成された社会を「場所共同体」として把握すべきと提言した理論的な論考であり、社会経済史的研究の枠を超え、社会史的関心からの応用も可能な分析概念を示した結果となっている。補論 1 は、アイヌ社会と和人との間の最後の武力衝突であるクナシリ・メナシの戦い（1789 年）に関連した史料の分析で、18 世紀末～19 世紀初頭における「奥蝦夷地」のアイヌ首長（惣乙名）層の存在形態を論じたうえで、戦いの收拾につとめた彼らの行動から「高度な政治的判断」（368 頁）を読み取ろうとしたものである。

第三部（Ⅲ）は、海産物の流通を主題とした章により構成されている。第 11 章は、近世における日本列島各地の商品海産物を俯瞰したうえで、魚介類の分布や海流といった自然条件をも視野に入れ、その市場流通や消費のかたちや献上品への組み込みを分析し、海産物に対する嗜好や食習慣の東西差の要因を分析する。日本列島の東西の文化的

差異という民俗学的関心を、流通経済史的方法を用い総合的に論じた、ユニークな成果となっている。第 12 章・第 13 章では、第二部で詳細な分析がなされた蝦夷地産海産物の流通が扱われている。第 12 章はおもに蝦夷地産海産物の日本市場への流通が問題として取り上げられる。表 1（457 頁）は第 5 章で論じられた箱館産物会所の史料から産物ごとの出荷額の全体像を復元した貴重なもので、表 2（475 頁）ではそれらの移出先（港湾）のシェアと全貌とが明らかにされている。そのうえで、産物個々の生産・集荷・消費の具体像が提示されている。第 13 章は蝦夷地産物のうち、俵物（鮑・海鼠）・諸色（主に昆布）といわれる輸出海産物の集荷・回漕・輸出に焦点を当てた論考である。長崎への正規の専売ルートに占めるシェアとともに、薩摩藩による琉球経由の昆布輸出にも目配りし、その政治経済的意義を論ずるとともに、国際商品の生産者たるアイヌ集団の存在意義にも目を配るべきと提起している。第 14 章・第 15 章は松前・蝦夷地産海産物生産に関する個別論考である。第 14 章は 18 世紀末の菅江真澄の記録にみえる鱈漁の様子を紹介したうえで、従来手薄だった松前・蝦夷地産鱈の生産・流通・消費に関する研究の重要性を説いている。第 15 章は明治期北海道の鯨漁場で消費される薪炭材の乱獲をテーマとする。それへの対応として、札幌県や北海道庁の植樹奨励策があったが、結果的にうまく機能しなかったことの歴史的意義を論じ、環境史研究の現代的意義を問いかける、問題提起的な論考である。